

特別支援教育におけるキャリア発達支援

一肢体不自由特別支援学校におけるキャリア・パスポートの活用一

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 学校マネジメント分野 飯島輝己

1. 問題の背景

令和2年度から、キャリア・パスポートが小学校、中学校、高等学校などの全校種において一斉に実施されることとなり、特別支援学校においても同様に実施されることになった。キャリア・パスポートとは、平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が提案した、「学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材」に与えられた名称である。中教審答申を受けて、平成29年に告示された小学校学習指導要領の総則には「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」がうたわれ、特別活動の学級活動の内容に、「一人一人のキャリア形成と自己実現」という項目が新たに加えられた。その後、中学校、特別支援学校小学部・中学部、高等学校、特別支援学校高等部の順に公示されたすべての学校種の学習指導要領の総則と特別活動の内容にも同じ項目が追加されており、全校種において特別活動とキャリア教育との結びつきが強められたとすることができる。

中教審がその導入を提案した「学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材」について、キャリア・パスポートという具体的な名称が現れるのは、平成28年2月に実施された文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会第4回特別活動ワーキンググループの会議においてである。ワーキンググループは、各教科等との往還以前の問題として特別活動の中での往還ができていない現状であるということや、特別活動に

おける教材がないことが課題であるとし、そのためのポートフォリオ的な教材の仮称として「キャリア・パスポート」が初めて提案された。このキャリア・パスポートは、すでにアメリカで1990年代からオハイオ州で実践されており、それを参考にしたものである。

中教審答申を受けて平成30年6月に「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議が設置された。その下で作成されて、平成31年3月下旬に文部科学省から各都道府県教育委員会宛てに通知された『「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項』には、特別支援教育の項目は見られるものの、具体的な様式例の提示はなされなかった（小学校、中学校、高等学校のみが例示されていた）。ただし留意事項には、キャリア・パスポートが「都道府県教育委員会等、各地域・各学校で柔軟にカスタマイズされることを前提」としていることが明記されていたことから、山梨県教育委員会では、他の学校種の様式例を参考に、目標設定や振り返りのシートとともに特別活動に限定した形での様式を作成し、特別支援学校用に作成した例示資料とともに各特別支援学校へ配布した。これに基づいて実習校である特別支援学校においても自校の現状に合わせて若干の変更を加え、今年度から実施されている。

このように、実習校のキャリア・パスポートは特別支援学校用に内容を書きやすくしたものである。しかしながら、そもそも児童生徒が主体的に活用していくことを目的とするツールであるという大前提が、実習校のような障害が重く主体的に活動することが難しい児童生徒が在籍する肢体不自由特別支援学校

において、どこまで想定できるのだろうか。

私が今回、このキャリア・パスポートの活用について研究するに至った理由には、日頃から主体的に活動することが難しい児童生徒に対するキャリア教育の難しさを感じてきたことにある。そのような中で今回のキャリア・パスポートがキャリア教育の行き詰まりを打開するきっかけになり得るのか、課題を踏まえた上でしっかり検討していきたい。

2. 研究の目的

特別支援学校には、様々な実態の児童生徒が在籍している。その中でも肢体不自由の児童生徒の場合、肢体不自由単一の障害から知的障害を伴う障害、障害の重い重度重複障害と実態の幅が広い。このような様々な障害種の児童生徒が在籍する状況の下で、教師の児童生徒への関わり方や保護者との関わり等を含め、どのようにすればキャリア・パスポートを「よりよい活用につなげることができるのか」。活用の難しさが想定される重度重複障害の児童生徒が在籍する肢体不自由特別支援学校におけるキャリア・パスポートの活用をする上での課題把握とその解決についての方策を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) キャリア・パスポート実施上の課題把握のための聞き取り調査

キャリア・パスポートの実施上の課題を把握するために、校長、教頭、進路指導主事に聞き取り調査を行った。校長、教頭については学校全体の大局的な課題把握の観点から、進路指導主事は専門分野での総合的な課題把握の観点から重要な示唆が得られると考えたからである。

調査期間：7月28日～8月4日

調査対象：校長（A-1）、第1教頭（A-2）、第2教頭（A-3）、進路指導主事（A-4）

調査時間：平均約40分

調査項目：

項目1 自校のキャリア教育の課題

項目2 パスポート実施上の障壁や懸念

項目3 様式のカスタマイズについて

項目4 キャリア・パスポートへの期待

(2) 課題解決についての方策の検討

管理職等への聞き取り調査から得られたキャリア・パスポートを導入する上での課題について、どのようにすれば課題を軽減し、より良い活用につなげることができるのかを検討するために、実習校における学部や教育課程の異なるクラスを対象とした参与観察（今回は中学部の下学年の教育課程および知的代替の教育課程のクラスと小学部の自立活動を主体とする教育課程のクラスを対象）と、参与観察クラスの担当教師を対象とした聞き取り調査を行った。

参与観察

調査期間：6月中旬から11月上旬

調査対象：中学部下学年・知的代替クラス（クラスⅠ）、小学部自立活動主体クラス（クラスⅡ）

調査時間：平均13コマ

聞き取り調査

調査期間：10月中旬から10月下旬

調査対象：参与観察クラス担当（教諭1（B-1）、教諭2（B-2）、教諭3（B-3）、教諭4（B-4））

調査時間：平均約40分

調査項目：

項目1 キャリア教育の全体計画への意識

項目2 将来を見据えての指導や支援

項目3 パスポート実施前後の印象の変化

項目4 「キャリア」の言葉に対する印象

項目5 キャリア・パスポートが児童生徒のキャリア発達を促すものになるか

項目6 作成への負担

項目7 研修会の必要性

項目8 作成する上で必要なもの

項目9 キャリア・パスポートに対する意義

4. 調査と分析

(1) 管理職等への聞き取り調査を通じた課題の抽出

項目1：自校のキャリア教育の課題

校長や進路指導主事が、所属校の教師間でキャリア教育に基づいた指導や支援への意識が貫徹していないことを懸念しているのに対し（A-1、A-4）、そもそもキャリア教育を12年間続けて行うこと自体が難しいのではないかと（A-2、A-3）、高等学校籍の教頭たちは考えていることが分かった。

項目2：パスポート実施上の障壁や懸念

キャリア・パスポートを行うことで、さらに教師の業務が増えてしまうことに加え（A-1、A-4）、児童生徒が主体的に行うべきキャリア・パスポートの活動が教師主体の「仕事」に転じてしまうのではないかと（A-2）、ということ懸念していることが分かった。

項目3：様式のカスタマイズについて

学校が決めた様式を児童生徒の実態に合わせて改変することについては、大枠の軸が合っていれば自由でよい（A-1、A-2、A-3）という考えに対し、進路指導主事はまったくの自由にしてしまうとかえって煩雑になるので、学校として集約する必要がある（A-4）、と考えていることが分かった。

項目4：キャリア・パスポートへの期待

小学部から高等部までの連続性のある指導や支援ができることから、人生を見通せるツールとなることに期待（A-1、A-2、A-3）している。加えて、進路指導主事の実際的な立場からは、高等部卒業後の一般就労先または福祉就労先への引継ぎのツール（A-4）としても活用可能ではないかと期待している。

管理職等から得られた上記の課題のうち、項目1と4は長期的な課題であり、項目2と3が当面の課題であることから、本研究では、項目2と3から抽出した課題点について、検討していくこととした。その結果、キャリア・パスポートの実施上の課題を①教師主体の「仕事」になってしまう恐れ、②業務量の増加、③様式のカスタマイズの課題の3点に絞

り込むことができた。以下では、これらの課題について調査結果を元にそれぞれ分析していく。

(2) 「教育課程別」クラスへの参与観察と聞き取り調査による課題解決方策の検討

分析1 キャリア・パスポートが教師主体の「仕事」になってしまうことを回避するには

この課題は、とりわけ肢体不自由特別支援学校のように手指等を動かすこと自体が困難であり、自己の表出方法や主体的な活動に難しさのある児童生徒の活動に対し、教師が児童生徒の活動を先回りしてしまっていて活動できる余地を失いやすい。しかし、実習校における教育課程別の参与観察では、大きく2つの活動ができていることが分かった。1つは、写真や実物を提示したり教師と一緒に目標などを書いたり、児童自身が提示された好きそうな写真を目で見て選択したりする中で、相手の意思を確認し、次の取り組みに繋げるという活動ができていることが分かった。



図1 写真を提示し、児童の表情や目の動きから意思を確認し、次の取り組みに繋げる

(クラスⅡ)

第2に、中学部の下学年・知的代替クラスでは、図2や図3のようにキャリア・パスポートの記入シートの枠の大きさを広げるなどの工夫をすることで、生徒が主体的に取り組みやすくなることが分かってきた。生徒が考えたことを自ら書いたり、ひらがな表に指で示して伝えたことを教師と一緒に書いたりすることで、生徒自身が見通しをもって活動に取り組むことができていた。また、小学部の自立活動主体のクラスでは、図4や図5のよ

うにキャリア・パスポートとは別の用紙で児童が教師と活動したものを縮小コピーして貼り、キャリア・パスポートの様式に合うようにすることで、自分のものであると実感できるように教師が働きかけていることが分かった。



図2 生徒がひらがな表で指示した言葉を受け、教師が生徒と一緒に言語化する
(クラスⅠ)

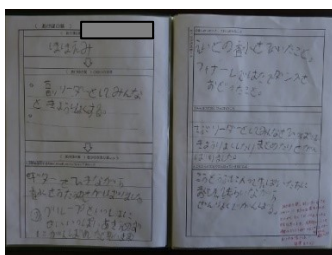


図3 枠を広げる工夫によって、生徒が自身自身で考えを言語化する (クラスⅠ)



図4 別紙での活動を縮小コピーして、教師と一緒に貼る (クラスⅡ)

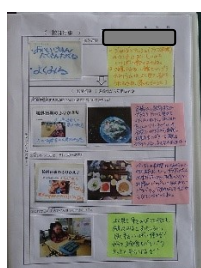


図5 児童が教師と記入した目標や反省を縮

小コピーし、キャリア・パスポートの様式に貼り付ける (クラスⅡ)

聞き取り調査では、特別活動で得られたことを今後どのように生かすのかということを持た考えさせるのではなく、言語化して他者に伝える活動を行わせることで、キャリアへの意識に繋げることができたと、担当教師が感じていることが確認できた (表1)。

以上のことから、キャリア・パスポートの活用については、当初、肢体不自由の児童生徒、特に重度重複障害の児童生徒には主体的な活動は難しいのではないかと、どうしても教師主体の仕事になってしまうのではないかとという恐れがあると考えられたが、「教師の工夫次第では、児童生徒の主体性を増やすことが可能」であるという分析結果に至ることができた。

表1 キャリア意識に繋がることを実感 (聞き取り調査)

実際にやってみてすごく感じたのが、Aさんが・・・
みんなに伝えるってことをすごく意識できて、・・・自分から言ったので、やっぱりこういった取り組みから今後に生かせることを自分なりに見つけて、こうやっていきたいってことを考えられたってことはすごく良かったと思いました。
(B-2)

分析2 業務量の増加の懸念にどう答えれば いいか

この課題は、参与観察クラスの担当教師からの聞き取り調査を元に分析を行うこととした。調査から挙げられた意見では、キャリア・パスポートを使った活動を実施することについては負担ではないという意見や、たとえ新たな活動であったとしても活動への意義を感じることができれば、負担には感じないという意見を聞くことができた。その理由として、B-3の教師の言葉にあるように、キャリア・パスポートの取り組みに意義を感じられることが大事であるということが分かった (表2)。

表2 キャリア・パスポートは負担か（聞き取り調査）

負担ではないです。	(B-2) (B-4)
全然負担ではないです。楽しく取り組ませてもらってます。	
意義のあるものだったら、負担には思わないと思いますし、どんなものでも。	(B-3)
子どもと一緒にやるっていうことが違ってきているのになって思うんですね。	(B-1)

どのようなことについて B-3 の教師が意義を語っているのかをまとめたのが表3である。B-3の教師は、キャリア・パスポートを使って活動を行うことで、教師と児童生徒が共に活動に見通しをもって取り組むことができたことや、キャリア・パスポートの取り組みを児童生徒と一緒に丁寧に取り組めたこと、個別の指導計画とは違い、子供と同じ目線で目標設定や反省ができたことなどが挙げられていた。また、他の教師からも B-3 の教師と同様にキャリア・パスポートの活動に対する意義を感じている意見が挙げられていた（表4）。

以上のことから、キャリア・パスポートを通じての活動は、実際には教師の業務量を増やしてしまっているわけだが、表3や表4の意見からもキャリア・パスポートを使った活動を通じて「意義が感じられる限りには、負担感は少ない」という分析結果に至ることができた。

表3 キャリア・パスポートの意義（聞き取り調査）

でも、子供と一緒にやっていく中で、やっぱり自分たちの見通しも持てるし、振り返りにもなるし、子供にとっても教員にとってもすごいメリットがあるっていうか、こっちもやっていて楽しいし。	(B-3)
行事もただやるだけじゃなくてしっかり丁寧に事前事後もやってっていう一つ一つ行事に対しての私の意識も変わりましたし、	(B-3)
（個別の）指導計画とかはやっぱり子供がいないところでひたすら作ってって感じなので、そうじゃなくて	

子供たちと対話しながら一緒に考えられるっていうところが違うのかな。

(B-3)

表4 他教師が感じている意義（聞き取り調査）

特活でやる内容について一つは形になったっていうか振り返りもできるような形になったっていうのと、	(B-1)
取り組んでいくに従って、このパスポートがあるからやりやすいのかなと思うことがありました。自分自身も見通しを持てたりとか。	(B-2)
多分キャリア・パスポートがなかったら、どこまで事前をして、事前でどうするのか1から決めなきゃならないと思うので、そういうところがある程度枠ができていたのは良かったなって思いました。	(B-4)

分析3 カスタマイズは、どこまで許容できるか

この課題は、参与観察クラスの担当教師からの聞き取り調査を元に分析を行うこととした。キャリア教育は、特別活動と各教科等を往還しながら学校全体で実施すべきとされているが、それでは活動の範囲に際限がなく、キャリア・パスポートの一定の容量や限られた活動の時間内で満たすことは非常に難しい。また、特別活動においてこれまで特定の教材がなかったことから、経験の浅い教師を中心にどのように活動を進めていけばよいのかが見通せない点も多々見られた。しかしながら、今回キャリア・パスポートが特定の教材として位置付けられたことによって、見通しをもって内容を計画し、活動に取り組むことができたことが分かった。そしてその様式についても基本の項目を維持しながらアレンジを加えることで、基本軸は保たれつつ児童生徒の実態に応じた活動が可能になってくると考えられる。さらに、活動で作成したキャリア・パスポートを介して児童生徒や保護者と関わる上でのきっかけになるということも分かった（表5）。

以上のことから、キャリア・パスポートの活用について「特別活動に当面は限定した現

在の形式を蓄積していくことが妥当」という分析結果に至ることができた。

表5 キャリア・パスポートの活用範囲（聞き取り調査）

すべてがキャリア・パスポートになってしまう・・・ 際限ないな・・・何やってもキャリアになっちゃうな って感じがして	(B-1)
特活でやる内容について一つは形になったっていうか 振り返りもできるような形になったっていうのと、	(B-1)
枠は一応このままで、プラスアルファしてもいいのか なって気はしますね。	(B-1)
親御さんと話す会話のきっかけになったりとか、子供 とのコミュニケーションのきっかけになるのかなと思 って。	(B-4)

5. 考察と今後の課題

年度当初、障害の重い児童生徒に対してキャリア・パスポートを用いて主体的に活動を進めることに困難を感じていたが、子供たちが時間的や物理的な制約がある中でもできることを広げようと努力する教師の工夫次第では、主体的に活動に取り組める可能性があるということが分かった。

本文中では触れていないが、教師の中には所定の記載欄以外にもコメントを残す者がいた。児童生徒の活動に対し、教師がその時に感じたことをメッセージとして付箋を使ってコメントを加えることによって、断片的な文字や写真に意味が与えられ、児童生徒の活動の様子が他の教師や今後関わる教師たちに伝わるものとなる。同時に、教師がその時どのように感じていたのか、どのような思いであったのかを残すことで、キャリア・パスポートがいわば「アルバムのなもの」となり、児童生徒と教師、児童生徒と保護者、教師と保護者のそれぞれが関わるきっかけとなり得るものになるのではないかと考える。

今後の課題としては、本研究の参与観察が小学部と中学部のみであったことから、高等部における検証が必要であること、また、キ

ャリア・パスポートの効果がキャリア教育の継続性に寄与できているかを見届けるには、1年間ではどうしても分かりづらいため、今後の継続的な検証が必要であると考える。

6. 参考文献

藤田晃之. キャリア教育の実践

https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/041_001.pdf（最終検索日:2021.1.30）

降旗 友宏. キャリア・パスポートの根拠

<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/zensin-30/data/career-passport-konkyo.pdf>

（最終検索日:2021.1.30）

文部科学省. 「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/143/index.htm

（最終検索日:2021.1.30）

文部科学省. キャリア・パスポートって何だろう？

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/143/shiryo/icsFiles/afiedfile/2018/10/03/1409581_013_2.pdf

（最終検索日:2021.1.30）

文部科学省. 「キャリア・パスポート」例示資料等について

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm（最終検索日:2021.1.30）

文部科学省. キャリア教育

https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/mext_propulsion_20180223.pdf

（最終検索日:2021.1.30）

文部科学省. 小・中・高・特別支援学校学習指導要領（平成29年、30年度告示）

文部科学省. 特別活動ワーキンググループ（第4回 平成28年2月24日）における主な意見

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/066/siryu/attach/1371054.htm

（最終検索日:2021.1.30）

山梨県教育委員会. やまなしキャリア・パスポート 実施の手引き（2020.4）